

古銅器、漢魏六朝から唐宋にわたる彫刻、唐朝より清朝に及ぶ陶磁類を主とするが、その他に埃及の彫刻、ルリスタン及びスキタイ系の銅器、ガンダラの石彫、ハツダのスツツコ、ベルシヤの焼物から更にフランス、イギリスの木工品に及ぶまでその数甚だ多く、近代ではフランスの油繪、故子爵黒田清輝氏の遺作數點も加へられ、又第二會場の常盤華壇には日本の民藝品が多數出陳された。世界古美術品と言へばその對象は頗る廣汎であつて、その粹を網羅する事は勿論現在の日本にあつて出来る事ではなく、それをこの展覽會に要求するのは無理である。概説すれば金石陶磁類のよく集められたのに對して繪畫關係のものが甚だ僅少であつたのは遺憾であつた。併しアフガニスタンに於てフランスの探險隊が、一九二五年以降發掘したハツダのスツツコ彫刻が、佛首菩薩首合せて二十點の出陳を見た事や、ベルシヤの西部ルリスタンから最近發掘された小銅器が四十三點を數へ得た事は、世界美術史界を賑しつゝある最も斬新な材料が早くも日本に將來され公開された點に於て極めて意義の深い事である。スキタイの代表的遺物ではないにしても、此の種の銅器が公開された事や、ガンダラの彫刻がこれだけそろつて將來された事も、日本では始めてであつて研究家を裨益する所が多かつた。更に此處に吾人にとつて最も欣慶に堪えないのは、この展覽會に當つてその出品中の最も興味ある材料が多く日本に留る事になつた事實である。即ち前記ルリスタンの銅器はガンダラ彫刻の優品數點と共に全部帝室博物館の有に歸し、西域の壁畫偶像類は全部東方文化學院に購入された。ハツダのスツツコ彫刻二十點も子爵岡部長景氏の購入する處となり一時當美術研究所に寄託陳列されて居る。我々は外國の博物館が豊富なる西洋美術の多方面にわたる蒐集を有する他に、東洋或は近東の美術品にも驚く可く充實せる内容をもつて居るのに比して、日本の博物館や蒐集家が、支那日本の美術品に於ては世界に誇るに足る優品を多數所藏して居るにも拘はらず、ヨーロッパは勿論印度ペルシア埃及等の近東諸國に於る美術品の蒐集はあまりにも僅少であつて、この點常に遺憾に堪えなかつたのであつて、此度の展覽會に於ても、或はその多くは日本にとゞまらず、最近非常な資力を注いで組織的に

東西古今の美術品の蒐集に努めて居るアメリカ諸博物館に、その主なるものは歸するのではないかと言ふ懸念を抱かすには居られなかつたのであるが、その杞憂を拂つて、日本に留るものの多かつた事を悦ぶものである。(尾高)

### 故黒田清輝子爵記念像

故黒田清輝子爵記念像建設のことは、豫てより、故人の門下であつた岡田三



郎助、和田英作、和田三造、白瀧幾之助諸氏等の畫家達によつて發起せられ、その資を故人を追慕する人々の間の釀出に得て、同型の青銅胸像二基を作り、一は、故人が嘗て院長であつた帝國美術院に附屬し而もその遺産に基く記念事業として設置された美術研究所に之を寄贈し、一は故人が教授として生涯を終る迄在職し、不朽の功績を留めた東京美術學校に之を寄贈する計畫の下に、その工を進められてゐたが、豫定通り完成して、昨秋十一月二十七日、東京美術學校講堂に於て、除幕並に贈呈の式が舉げられた。

式は、小林萬吾氏司會、岡田三郎助氏式辭、故子爵の嗣子黒田文紀氏除幕、白瀧幾之助氏建設經過報告、建設發起人總代和田三造氏贈呈の辭、正木帝國美術院長及び和田東京美術學校長謝辭、文部大臣祝辭、宮田光雄氏祝辭、及び親戚代表樺山愛輔伯爵謝辭を以て滞りなく終り、二つの胸像は美術研究所内黒田子爵記念室と、東京美術學校校舎内とに永く安置されることゝなつた。

記念像はほゞ等身大、光澤ある黒褐色に仕上げられ、白大理石の板に載せて、之をチーク材の方柱形臺座で支へてある。その全體は高村光太郎、高村豊周兩

## 書評

### 觀山遺作集

明治大正畫壇に於ける下村觀山の業績については茲に贅言を要せぬところであるが、雅邦、芳崖の指導のもとに藝苑に立出した畫伯は、研鑽よく東西古今の諸派を修め、遂にその独自の畫境を拓いた。

昭和六年初春その遺作展觀にあつて、吾人は氏の藝術のほゞ全貌を窺ひ得たのであるが、今其の遺族によつて、日本美術院同人及び畫伯生前の關係者にわかつために刊行された「觀山遺作集」は、遺作展觀會出陳の作品がその大部分を占め、之に若干の他の作品が加へられて成つたものである。これは乾坤二冊に分たれた豪華版であつて、先づ第一冊は「雨の芭蕉」圖（明治二十三年作）に始まり、「蜆子和尙」（大正六年作）に終り、初期の「光明皇后」「繼信最後」「閨維」（共に明治三十年作、日本繪畫共進會展覽會出品）、文部省第一回展覽會出品の「木の間の秋」、「大原御幸繪卷」（明治四十一年作）「小倉山」（明治四十二年作）「魔障」（明治四十三年作）、再興日本美術展覽會の初期を飾つた「白狐」（大正三年作）「弱法師」（大正四年作）「春雨」（大正五年作）等の代表作が收載されてゐる。次に第二冊は「彈初め」（大正七年作）に初まり、秩父宮家御所藏の「懸崖

氏兄弟の勞作にかゝるもので、光太郎氏即ち像の原型を作り、豊周氏之が鑄造を完成した。臺座の設計は兩氏の協力によるところである。故人の風貌は未だ人の記憶に新なものがあつて、晩年は貴族院に籍を置いて政界にも駿足を延べたとは云へ、その眞面目は筆をとつて畫架に向ふ仕事着の姿にある。像は形の上にそれを示したのみでなく、よく故人の心を躍如たらしめて生彩に富み、近年、此の種記念像中の佳作たるを失はない。（青山）

春蘭」（昭和三年作）、久邇宮家御所藏「唐獅子」（昭和三年作）、伏見宮家御所藏「老松白藤」（大正十年作）を始め「豐太閣」（大正七年作）、「東坡先生」（大正八年作）、「鳳凰堂」（大正十三年伊太利羅馬日本畫展出品）、「魚籃觀音」（昭和三年作日本美術院再興第十五回展出品）、「しぐれ」（昭和四年作日本美術院再興第十六回展、羅馬日本畫展出品）等中期以後晩年の制作より絶筆「竹の子圖」（昭和五年作）等の代表作五十餘圖に滯歐中の模寫二圖と風景畫一圖及び少年時代の作品二圖が加へられてゐる。之等の年代的に掲載された氏の代表作を通觀すれば、人物畫といはず、歴史畫といはず、花卉山水といはず一筆をもゆるがせにせざるその作風は孰れも氏の謹直なる風格の反映であり、多面的なる氏の技巧はいづれの主題に於てもその意圖を表現し得てゐるが、就中その人物畫に優れたものを見出す。

尙卷末には觀山晩年の肖像と年譜が加へ載せられてゐる。觀山の作品は生前すでに日本美術院によつて「觀山作品集」として刊行されたが、こゝに又更に豊富にして精巧なる圖版によつて觀山の代表作に接し得ることは、研究者にとつて悦びとするところである。（隈元）

和緩映入 縦五九糎横四五・五糎 コロタイプ 一一三圖 昭和六年九月發行 編輯兼發行者下村仙 非賣品